

## 右と左の考古学

まほろん館長 石川 日出志

【導入】 前回の「石庖丁の考古学」終了後に、受講された方から伺った<右利き>のお話がとても面白かったことから、今回は「右と左の考古学」を取り上げました。行為時の左/右についてはヒトや類人猿など様々な研究がありますが、ヒトは誕生後に利き手の左右が明確化し、左利きが右に変更されたり、逆にスポーツ選手のように左利きが有利と見られたりする場合もあります。考古資料を見ると、すでに縄文時代に磨製石斧を右手で研磨する事例が確認でき、中国では青銅器時代初期に右利き用の儀礼用の酒器が現れるなど、右利きを指向するのはそもそもものではなく、後発のことのようです。

本日は、古代の土器をじかに観察して、その土器をつくる際のロクロ回転が左/右（上から見て時計回りを右とします）どちらなのかを判別して頂きます。また、縄文・弥生時代の土器に施された縄文を観察すると、燃りの方向が分かります。その燃りの方向を追跡すると当時の人びとの文化動向を知ることができる場合があることを紹介します。

### 1. 利き手を考える 【1】

\* 八田武志 2008『左対右 きき手大研究』科学同人

#### (1) ヒトと霊長類の利き手

- ①. A. 幼児の利き手の発達過程： ゼロ歳児で次第に利き手が明確となる。  
B. 利き手変更歴と年齢の関係： 高齢者に多い利き手の変更歴。  
C. プロ・テニスプレイヤーの利き手： 対戦系のスポーツでは左利きが注目される。  
D. 霊長類の利き手： 左/右どちらかに極端に偏るわけではない。
- ②. 前回取り上げた石庖丁： 右利き用に製作・紐づけされ、稲穂を掴むのに用いられた。  
→ 利き手や、ある行為に使う手の左右は、ヒトの文化・社会や歴史と関係がありそうだ。

#### (2) 身の回りにおける右手用の器具： 現代では左手用も普及。

- ①. 利器： 庖丁・ハサミ・押切りなど → 刃付けの向き
- ②. 食器： 急須 → 注ぎ口に対する持ち手の位置
- ③. 道具： ゼンマイ（オルゴールなど）、ネジ釘、ハンドル式ドアノブ、瓶や缶のネジキャップ → 回して使う
- ④. 左右の区別がないもの： 箸・スプーン・ナイフ、斧・金づち・錘・カンナ（鉋）  
→ 左右対称に作られているか、交互に左右に動かす道具

### 2. 考古資料にみる右手使用

#### (1) 縄文時代の磨製石斧の研磨 【2】

- ①. 磨製石斧の製作過程： 礫 → 打ち欠き → 敲打 → 研磨
- ②. 表裏面中央の研磨方向は右下がりが多いが多数を占める。  
→ 研磨の動作を考えると、右手で研磨したと分かる。

\* 阿部朝衛 1987「磨製石斧生産の様相」『史跡寺地遺跡』青海町教委, pp.353-372

(参考) 旧石器時代の磨製石斧の研磨法は持ち手が確認できない 【参考】

## (2) 中国の青銅器時代初め 【3】

- ①. 新石器時代からある把手付片口土器が、青銅器時代初め（二里头文化期）になって、右手専用の儀礼用青銅器（爵）が現れる。

\*岡村秀典 2008『中国文明 農業と礼制の考古学』京都大学出版会

- ②. 東北部（遼寧省）でも土器の爵が登場するのは、二里头文化の影響と考えられる。  
→ 爵の持ち方などの儀礼作法が生まれ、周辺地域に広まったことが追跡できる。

## 3. 日本列島の土器づくりの中の「右」

### (1) 古代のロクロ利用土器・杯（つき） 【4】

- ①. ロクロ回転を利用して形をつくり出し、糸を用いてロクロ上の粘土塊から切り離す。
- ②. 土器面のロクロ目と糸切り痕からロクロの回転方向が分かる。
- ③. 蹴りロクロは近世からで、それ以前は手回しロクロ。

\*木立雅朗 2017「回転を利用した成形—ロクロと回転運動—」『モノと技術の古代史—陶芸編—』吉川弘文館, pp.245-270

### (2) 縄文・弥生土器の縄文 【5】

- ①. 縄文・弥生土器の縄文のほとんどは、専用で作られた撚り紐（縄文原体）を土器面に押しあてて回転して施したもので、
- ②. 撚り紐を見分ける： 撚りの方向と撚り合わせ、2回撚り合わせて初めて縄文の粒（節）が土器面に現れる。 撚りの左右と撚り合わせとその名称。

0段： 植物繊維を「こより」状に撚った状態。この状態の繊維は紐になりえないので0段とする（これを撚り合わせると紐として自立し得るので1段とする）。

r = 0段右撚り（「こより」を上/下から見て、撚りが手前から先方に時計回りに進むもの）

ℓ = 0段左撚り（「こより」の撚りが手前から先方に逆時計回りに進むもの）

1段： 「こより」2本をより合わせて「撚り紐」としたもので、通常の縄の状態に相当。L（1段左撚り）とR（1段右撚り）。

2段： LR（2段左撚り）とRL（2段右撚り）と、それを回転施文した際の縄文の現れ方。

- ③. 福島地域の縄文時代中期～弥生時代中期土器の縄文 【6】

・縄文時代中期土器： 天栄村桑名邸遺跡例＝LR縄文を縦に回転施文（糸は右下り）。

・弥生時代中期初め： 石川町島内遺跡例＝LR縄文を、口縁部・胴上部は横に回転施文（糸は左下がり）、胴下部は斜め回転施文（糸は横に近い）。

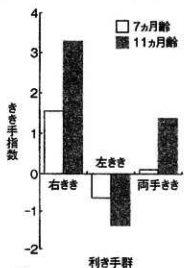
- ④. 弥生時代後期・天王山式土器になると突如RL縄文が現れる 【6】

・縄文時代中期以来の縄文原体とは逆方向の撚り方＝数千年の伝統とは異なる！

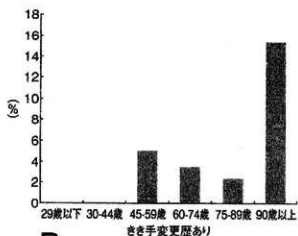
・東北部では、縄文時代からRL縄文や、それを斜め回転施文して糸を縦（や横）にする手法がみられる。

\*天王山式土器のRL縄文の採用と、糸の縦走・横走は青森県～北海道方面の手法が、東北地方南部にまで波及したものの。

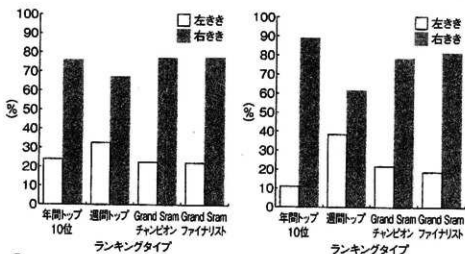
以上



A 乳幼児のきき手の発達



B きき手変更歴と年齢との関係  
Martin, et al., 2002 を参考に作成。

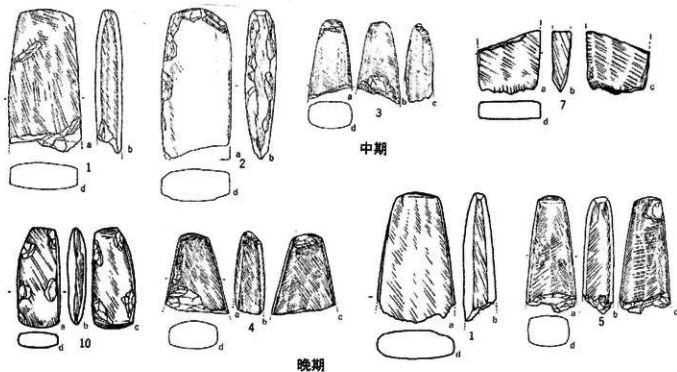
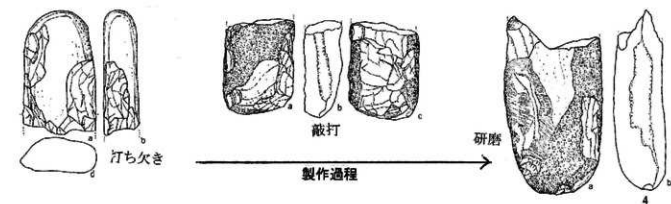


C ATP (左) と WTA (右) におけるランキングタイプ別の選手のきき手  
Holtzen, 2000 を参考に作成。

#### 霊長類のきき手研究

種	左手偏好	右手偏好
キツネザル	食物へのリーチング (Sanford, et al., 1984; Subcaminian, 1957)	
新世界ザル	食物へのリーチング (Box, 1977)	リーチ+行為 (Rothe, 1973)
旧世界ザル	野生での食物へのリーチング (日本研究)	テスト装置での食物へのリーチング (Deuel and Dunlop, 1980)
	非別課題でのリーチング (初期)	非別課題でのリーチング (後期)
	各種状況での食物へのリーチング (Beck and Barton, 1972)	多肢状況での操作 (Warren, 1977) 微妙な指でのつまみ (Preilowski, 1979)
類人猿	顔面へのタッチ (Diamond and Harries, 1984)	胸たたきの開始手 (ゴリラ) (Schaller, 1963) リーチング、捻 (ゴリラ) (Fisher, et al., 1982)

MacNeillage, et al., 1987 を参考に作成。



磨製石斧表裏面の研磨方向

類	方向	研磨方向							計
		↘	↓	↙	↔	↕	↔	↕	
大形	I類	13	0	0	1	0	1	0	15
	II類	16	1	1	1	0	5	2	26
	分類不可	7	0	0	0	0	0	0	7
	計	36	1	1	2	0	6	2	48
小形	I類	20	0	0	1	2	0	0	23
	II類	14	0	0	0	0	2	0	16
	計	34	0	0	1	2	2	0	39
合計		70	1	1	3	2	8	2	87

(矢印は、石斧長軸に対する線状痕の傾きを示す。)

縄文時代の磨製石斧の多くは右手に持って研磨された

(阿部朝衛 1987「磨製石斧生産の様相」『史跡寺地遺跡』青海町教委)

酒を温めて注ぐ小型の土甗に爵がある。爵は横断面がアーモンド形の把手と棒状の三足がついたもので、把手の左に細長い流し口がある。爵の起源については、全体の形と用途は器を差す関係がありそうだが、大きさ、把手の位置、足の形がちがうため、爵は二里頭文化で創出されたと考えられる。銅爵は土器のそれを模倣した形で、楕円形の平底に断面三角形の細い足がつき、細く絞った頸から細長い流し口と突った尾がびんとびた、軽快な形である(図18上)。二里頭遺跡から十数点が出土し、高さは10～20センチ。

爵は把手の左に注ぎ口がのびている。殷代の銅爵では把手の反対側に文様の正面があるから、把手のある側が背面である。三足のうち一足は把手の下にあり、ほかの二足は正面の両側にある。この配置の原則は例外なく厳格に守られている。このような非対称の器は、わが国の必須な、世界的に例が少ない。西洋のポットは把手と注ぎ口とが一直線をなしているからである(図18下)。この爵で酒を注ぐばあい、右手の人差し指を把手にひかれ、正面を相手に向けて左に爵を傾けるのが自然であり、明らかに右利き用につくられている。もしこれを左手で持つならば、胸部を揺る持ち方になり、親指で文様が隠れてしまうし、把手のある背面を相手にみせることになるからである。左利きには不便なこの原則は、爵が消滅する西周時代まで一〇〇年近くつづいた。このことから、爵の持ち方も酒の飲み方など、こと細かな礼儀作法があったことがうかがえる。

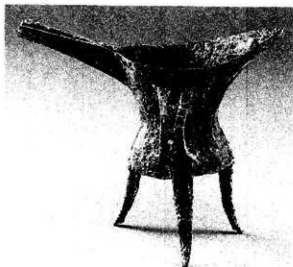
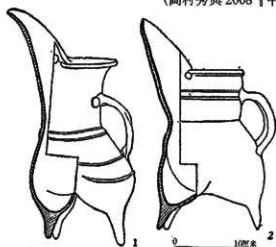


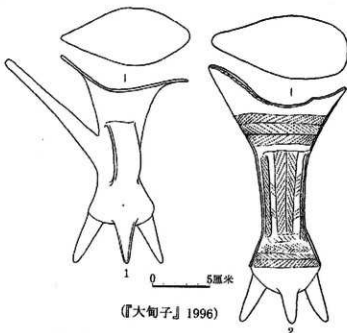
図18 二里頭文化の銅爵(上)、二里頭文化の銅爵と現代の急須・ポット(下)。

「夏」王朝(二里頭文化期: BC1750-1520頃)に現れた右手用の器  
(岡村秀典 2008『中国文明 農業と礼制の考古学』京都大学出版会)



新石器時代の  
把手付片口土器

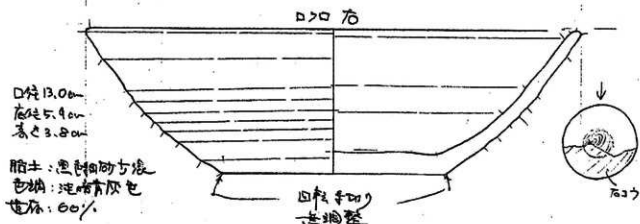
(山東省呈子遺跡:  
『考古学報』1980-2)



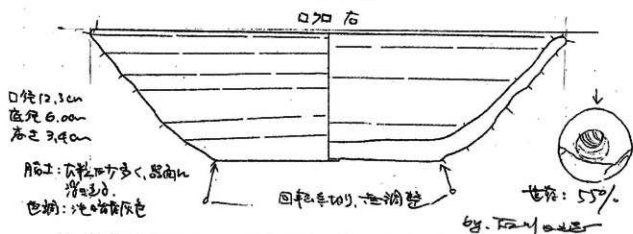
(『大甸子』1996)

遼寧省に波及した右手用の爵(土器)

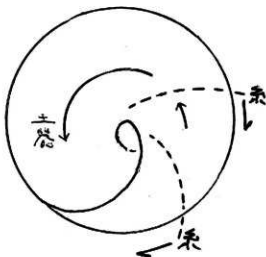
福岡市南区豊原町東山地区北群 U05-62E-5C-IV



U05-62E-PC-IV



ロクロ口が右回転のために、土器外面のロクロ目が右上がり、内面は左上りとなる



回転系切り痕もロクロの回転方向を示す

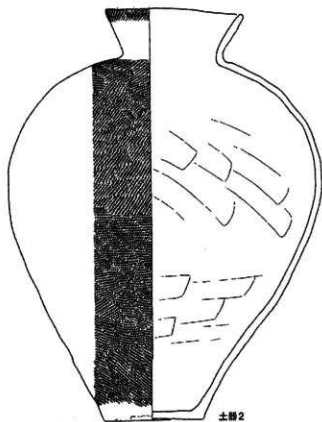
\*土器の底面なので、実際のロクロは逆回転であることに注意

ロクロ回転を用いた土器の実測図と底面拓本

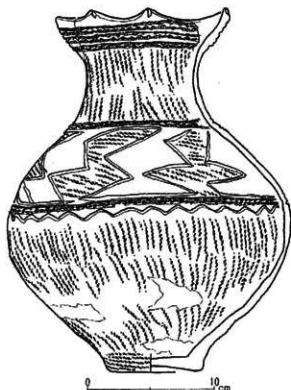




縄文時代中期中頃：L R縦回転施文  
(天栄村桑名部遺跡：福島県教委 1990)



弥生時代中期初め：  
L R横（口・胴上部）・斜（同下部）回転施文  
(石川町島内遺跡：石川町教委 1998)



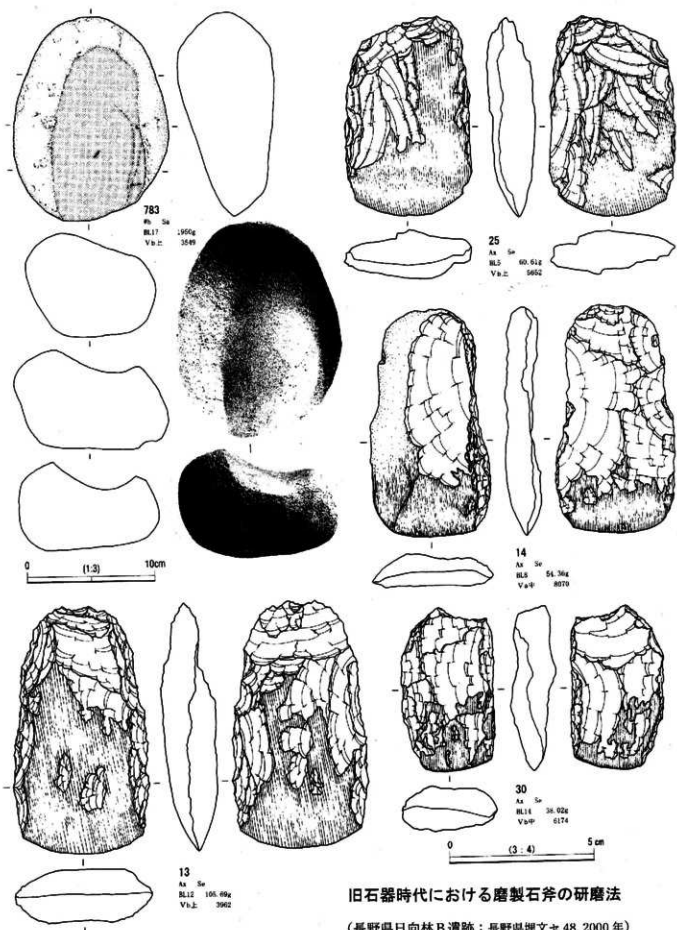
弥生時代後期前半：R L斜回転施文  
(頸部・胴下部＝条縦走，胴上部＝条横走)  
(白河市天王山遺跡：白河市 2021 掲載図石川トレース)



天王山式土器のRL 縄文は北方に由来

突然縄文の撚り方向が変る事例





旧石器時代における磨製石斧の研磨法

(長野県日向林B遺跡：長野県埋文々48, 2000年)